

## 新潟地震の時は…

- ・山ノ下劇場の辺りが陥没した
- ・慈光寺のあたりまで、水が押し寄せてきた
- ・一番被害が大きかったのが、紡績角周辺で液状化し、浸水した
- ・山の下郵便局の辺りは、1メートル位水が上がった
- ・山の下橋は、橋詰付近に陥没などの被害があったが、落橋はしなかった
- ・臨港鉄道の線路にも水が入ってきた
- ・神明町・臨港の辺りは、大人の胸の辺りまで水が上がった
- ・水は一端引いたが、翌日も水が来て腰まで浸かった
- ・昭和石油のタンクが破れて、油が山の下まで流れ込んできた
- ・昭和石油のタンクが、爆発すると言われたため、船で信濃川を渡って向う岸まで避難した

## 地域の社会特性

- ・山の下地区は、明治時代後期に、日本石油が新潟鉄工所をつくり、石油採掘用の機械、車両製造などを開始し、以降、大正期にかけて中小の工場も設立され、多数の労働者を抱える工場のまちとして発展しました
- ・工業地帯の拡大の一方で、天然ガスや地下水の汲み上げなどの影響により、広い範囲で地盤沈下が発生し、このことが、新潟地震の際の長期にわたる湛水被害をもたらすこととなりました
- ・現在は、大規模工場の撤退や縮小などにより、宅地化が広がっていますが、高齢化率は約37%と高い水準にあり、発災時の避難行動に相当の時間を要することが想定されます
- ・地区内に3階以上の高いビルが、ほとんどないことから、高齢者等の円滑な避難誘導対策が今後の課題となっています

## 地域の被害特性

- ・山の下地区は、信濃川河口の東側に位置し、北側は日本海、南側は通船川に面しており、三方を水に囲まれていることから、地域では、津波に対し強い危機感を感じています
- ・津波の到達時間が早く、地区内のほとんどが0メートル地帯にあり、高台が大山台公園、山の下神明宮の2箇所しかないことから、津波災害が発生したときには大きな被害を受けることが想定されます
- ・このため、山の下地区自主防災会では、飛行場道路より北側は山の下小学校へ、南側は山の下まちづくりセンターへ避難する実践的な避難訓練を実施しています
- ・また、大山台公園周辺の保育施設等は、標高の高いところにあるので、避難行動要支援者の避難場所として有効活用できるのではないかと考えています

## 各ブロックごとの具体的な避難方法

ブロック	特徴	期待される避難行動	避難目標
A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・A地区は、津波が信濃川から通船川を遡上して浸水する地域となっていますが、想定より高い津波が来た場合には、短時間（30分以内）で津波が到達する危険性もはらんでいます</li> <li>・山の下市場周辺は、標高が低いため、避難の際に注意が必要です</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・Aブロック北側は、山の下神明宮に、南側は、山の下小学校に、ただちに移動を開始する</li> <li>・山の下神明宮は、収容人数が少ないことや、標高が5m程度あることから、第2目標として山の下小学校への移動も視野に入れることとします</li> </ul>	《Aブロック北側》 【第1目標】山の下神明宮 300人程度収容可能 【第2目標】山の下小学校 2,400人収容可能（3F以上） 《Aブロック南側》 山の下小学校 2,400人収容可能（3F以上）
B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・B地区も、津波が信濃川から通船川を遡上して浸水する地域となっていますが、通船川に面していることから、短時間（30分以内）で津波が到達する緊急避難地域を多く含んでいます</li> <li>・大山台公園は、介護・保育施設に隣接していることから、一時的な避難場所として利用できるか検討していきます</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・津波到達までに時間的余裕がないことから、ただちに、山の下まちづくりセンター又は大山台公園に移動を開始する</li> <li>・どちらに避難するかは、各自治会又は個々の判断によるものとします</li> </ul>	《Bブロックまちセン周辺》 山の下まちづくりセンター 1,220人収容可能（3F以上） 《Bブロック公園周辺》 大山台公園 15,312人収容可能